

館原と代官所

館原(たてのはら) 三十四軒(一七八九年)

館(やかた)の前に原野が広がっていたため館は、館原村北西の折笠山・堂ノ上(あたかみ)にあり、旧館原村は館の南、寺ノ内(てらうち)にあった。

館とは、鎌倉時代から戦国時代まで、村を支配していた地主で、堀や土塁をめぐらした館、台地や山に築かれたものは要害、山城という。

『会津鑑』と『会津古墨記』には

「館 東西五十六間(二〇〇・八^咫)、南北三十八間(六八・四^咫)、応永十年(一四〇三)、小布瀬原右京亮(すけ)景勝(かげかつ)、折笠山に築き住す、八幡館と号す。折笠を家名とす」

「応永二十六年(一四一九)七月二十八日、館原の住人小布瀬原右近(景勝之の子)、近年新宮時康(ときやす)に属し、黒川(蘆(葦)名氏)より攻めて城搦(とうる)(落城)」

『会津鑑』一九七石(米で二九五五〇kg・六十^石袋で四九二・五俵)

村の西約七百^咫には、荒戸沢という溪流に長さ十二・六^咫(七間)の橋がある。上面は土。離れ村に「河角」「石田坂」。小名に 東向、西向、上台(うへのだい)がある。

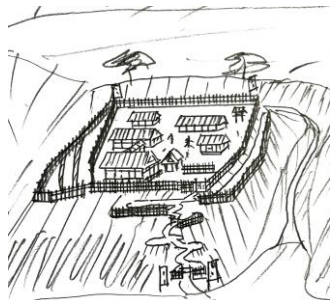


図1 館原館跡予想図

館原代官所

木曾組(山都町の二十三村)、大谷組(高郷町)、吉田組(西会津町の阿賀川北側)を支配、(西会津町)下野尻村の郡役所に属した。久昌寺の西に館原代官所があった。

一六八四年の代官所内石高 一一三九〇石
一八二七年の代官所内石高 一三二二〇石

図2 塩川代官所平面図 『耶麻郡誌』

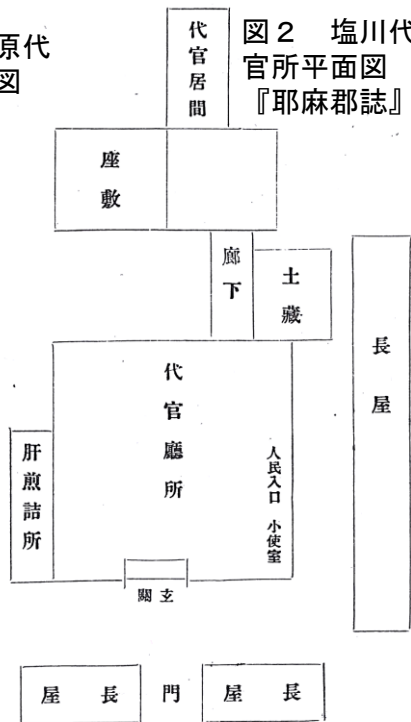
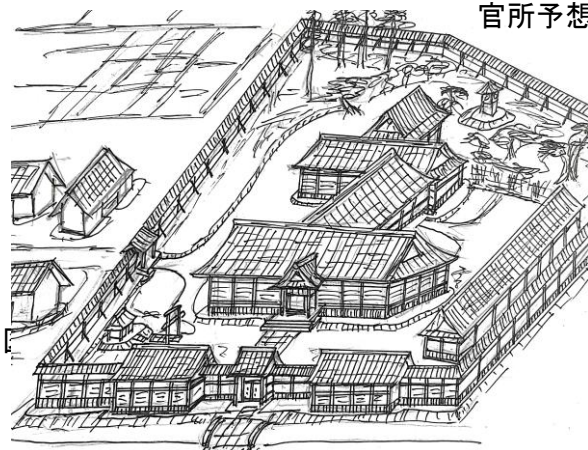


図3 館原代官所予想図



「館原代官所」は、塩川代官所とほぼ同じと思われるが、会津戦争で川井村から西軍の砲撃を受け、さらに会津藩により焼失し、その後取り壊されたが、代官稲荷と刻字のある石柱、入口門前の石橋、左側の郷蔵1棟が現存する。

藩主―家老―郡奉行―代官―郷頭―肝煎(きもいり)

―地首(地頭・年寄)―鍛頭・老百姓

郡奉行は一郡に一人。代官は約二組二万石高に一人

弘化年間(一八五四)の館原代官 高橋 渉

帳附 吉村治左衛門・甲斐惣右衛門

帳書 宮城三平・上野左十郎・高橋三十郎

郷廻 門 平・庄五郎

代官は藩より直接派遣、帳附は身分低い藩士、帳書

は肝煎から任命した。

木曾(山都)は町扱いで肝煎ではなく「陰断」と云う

館原代官所の始まり

『会津藩家世実紀』天明八年(一七八八)二月七日「御代官共郷村出役被仰付」

「地下之風義急ニ取直之計被仰付候上者、御代官共も出役可然由、郡方主役始郡奉行同添役等存寄申出候ニ付、出精取計候様被仰出候旨申渡之、

坂下組牛沢組 鋤柄友之助

小田付組小荒井組 宮原嘉次馬

熊倉組五目組 添嶋善兵衛

野沢組 志賀孫太郎

山三郷 手代木太平衛 百石取り

支配所附銘々相渡之」組はいくつか省略

文久二年(一八六二)野沢組を館原代官所に併合

明治三年五月の館原村肝煎 折笠豊多

明治五年十一月十三日、第五小区長 宮城八郎

明治八年八月十二日、三小区、山都村へ

木曾村、廣野村、三ツ山新田、館原

稲荷神社鳥居刻字の鳥居が現存する

『山都の高齢者回想録』 堂山 宮城不二男より

「山郷館原代官所の記録」

「代官 第二十四代 相沢平右衛門

帳付 南隆助 鈴木喜一郎

帳書 高橋三十郎(郷頭)宮城三平(郷頭) 上野五右衛門

の刻字がすでに確認されていた。令和七年四月七日現存を確認



1、代官所の石橋



2、代官所の郷蔵

高橋三十



3、石柱

館原の戊辰戦争

館原村の石高

寛永十九年(一六四二)	一五二石
寛政元年(一七八九)	一九七石
文化三年(一八〇六)	二一六石

久昌寺

曹洞宗瀧澤山
 東西 三〇・六畝(十七間)
 南北 一五・三畝(八間半)
 天正十四年(一五八六)幽禅の開基
 本尊 地藏菩薩
 観音堂 十一面観音像を安置

『会津鑑』には、貞治二年(一二六三)松尾の真福寺の幽禅が建てる。かつては臨済宗だった。慶長一九年(一六二四)今の村に移す。旧地を「ノ寺内」と称する。そのあとに馬頭観音の石塔がある。

寺は理由は不明だが一時荒廃した。

正保四年(一六四七)四月三日開基『耶麻郡誌』

県道

坂下街道館原道 明治二十九年十月開通

岩越鉄道

山都駅〜荻野駅 大正二年八月一日開通

館原隧道 三四〇メートル

八幡神社

・祭神は武運の神、応神天皇・誉田別命(ほんだわけのみこと)を祀る

東西 四六・八畝(二十六間)

南北 四三・二畝(二十四間)

『会津鑑』二十六歩、二十四歩とあり

本村より移した稻荷社もあり

・西に神社林(じんじやりん)の場所が旧八幡神社があった場所とみられる。

三山(みつやま)新田

同じ形状の峰が三つ並んでいるため
 寛文四年(一六六四)館原地内に堂山村の宮城氏が、田畑を開墾した。九軒。『新編会津風土記』小名に 大森、東向、土手がある。

『会津鑑』に二四八石(米で三七二〇〇kg・六十^キ袋で六二〇俵)

文献

『新編会津風土記』文化六年(一八〇九)会津藩編さん。幕府に提出。

『会津鑑』寛政元年(一七八九)会津藩士高嶺寛大 夫慶忠が編さん。

『会津古墨記』文化十(一八一三)年写本。原本は江戸前期中期作か。

館原区会議録から判明したこと

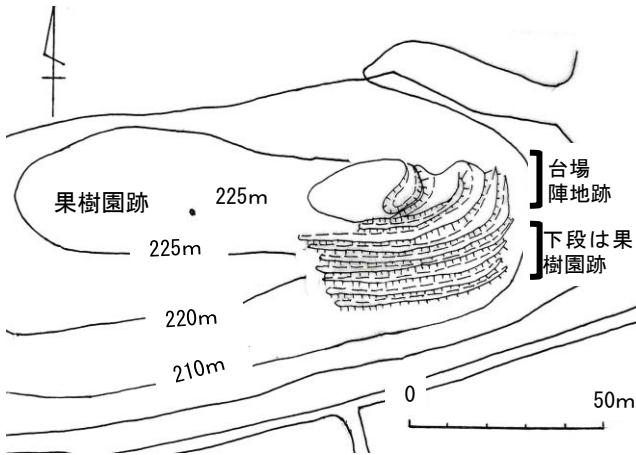
○天保七年(一八三七)以降の村の歴史

○祭礼の記述

○会津戦争で館原が九月四日、二十三軒焼けた

会津戦争・横峰陣地跡

東西 53m × 23m 2025. 4. 19実測



横峰(峯)山の会津戦争陣地跡

『山都の高齢者回想録』より
 「戊辰戦争の言い伝えと遺跡三つ」
 三ツ山 笠井久工門より

二、横峰(峯)山の塹壕

横峰(峯)山の頂上の南東斜面に戊辰戦争の時に会津藩が築いたといわれる塹壕の跡地がある。略(昭和九年)横峰(峯)山の共有地を果樹(梅)を植え付け、一日いくらかの日当を得て生活の足しにした。この開墾により、頂上にあつた塹壕も大半取り崩されて、現在ほんの一部だけを残しておる。その後その地周辺の樹木は大きくなり探すのも容易でない。

三、松代藩占拠地

戊辰戦争の時、陣ヶ峰、大谷方面から進撃してきた西軍の松代藩は三つ山の麓を通り横峰(峯)山麓一帯と付近の農家を占領して大休止をした。略(当時)の「占領地」の農家の扉には今でも「松代藩占領」と墨跡が残っており、西軍の残したものとては貴重な遺産である。

1、横峰山の陣地跡

令和七年四月、現地を折笠氏と確認したところ、横峰山の南東部には、人工的な遺構があつた。

① 削平された果樹園跡の平場とコククリート柵

② 南東に面した低い土塁に囲まれた平場と斜面に細長く構築された段々の平場

この中で②は、頂上の最も高い所にあるものは、砲台の台場跡で、「胸壁」と呼んだ高さ六〇センチの土塁が半月状にある砲台の台場跡である。また、南東斜面の細長い平場は、一部が「要害」と呼ぶもので、同様なもの、母成峠や戸ノ口の古戦場でもみられる。

2、松代藩占拠地

松代藩の「松代藩占領」の土蔵墨書は、残念ながら解体され残されていなかった。

これらの遺構は、伝承として残されていたものであるが、現地には、今でも陣地跡が残されていることと大変貴重なものである。墨書は、残れなかったのは残念である。

会津戦争と新選組

新選組は九月一日〜四日まで山都に滞在

山三郷の会津藩本営は、館原代官所

慶応四年八月

八月二十六日、津川より退却した会津藩、舟渡を渡り、胸壁を築き、船橋を切断、沿岸の舟棧敷を収容。白虎一番寄合組隊中隊頭原早太は窪村の胸壁を守り、純義隊は総督大竹主計、隊長小池周吾は東羽賀を守る。陣将の上田学太輔は大原の本営にいた。『会津戊辰戦史』

八月二十八日、東西両軍川を隔て相對峙し、東兵は大砲を装填、西兵は片門の山上に大砲を装置し、連弾する。朱雀四番士中隊、付属隊、砲兵隊、結義隊は高久より軍を返し山三郷に赴く。『会津戊辰戦史』

下刻(十一時)朱雀四番士中隊、付属隊、砲兵隊、結義隊は高久を發し、舟渡に至るや山三郷館原に向かうべしと命令あり、よつて未の国(午後二時)諸隊ともに路を東岸にとり、阿賀野川を渡り、日没の頃館原に至り、舟棧を収め成兵(じゅへい・守備兵)を置く。『会津戊辰戦史』

八月二十九日、西兵朝より砲銃を發して戦いに挑む。東兵胸壁にありて戦う。弾丸雨注(うちゅう)す。『会津戊辰戦史』

朱雀四番士中隊、付属隊は、朱雀一番寄合組隊と交代して中反村を経て新町に至りしが、故ありて中反に返り陣す。夜に入り大雨、町野主水、開場辰治をして反隊を率いて一竿(ひとさく)を守らしむ。更に中反を發し木曾、館原を過ぐるや西兵前岸(川井)より火光を認めて銃を放つ。炬火(きよか)を滅して進み、西海枝村(荻野)に至りて天明けすなわち一竿に至る。この地館原の西方にありかかる要害の地なり。『会津戊辰戦史』

八月三十日、朱雀四番士中隊、付属隊は中反に胸壁築き成兵(守備兵)を置き、砲兵隊は兵を高目村に進む。朱雀四番士中隊付属隊は、一竿の渡頭守る。塚越富吉(小栗上野介の家臣で妻は横山主悦の家に宿す)前岸の西兵が弾薬を運搬するを見て銃撃、西兵狼狽して走る。敵兵射撃し、我が兵応戦す富吉の胸を貫き死す。『会津戊辰戦史』

九月一日、巳刻(十一時)頃朱雀四番士中隊付属隊は、共に中反を發し、未刻(午後二時)頃、小綱木に至り成兵を置く。砲兵隊高目村退陣。朱雀四番士中隊付属隊は、一竿の渡頭を渡る。軍目篠田勝之助、退却の命令を伝えければ、兵を収めて木曾村に至る。『会津戊辰戦史』

大鳥圭介、第二大隊と第一大隊の残兵合わせて二百人を引き連れ、友成将監を神青隊に付け塩川に残して一日出發。慶徳にて昼食し、木曾に泊まる。木曾には長岡の兵詰めていて、その隊長とも議し、軍事方とも謀り明日の進軍を定める。『南柯紀行』

九月二日、早天、朱雀四番士中隊付属隊、小綱木を發し、辰の刻(八時)真ヶ沢村に進む。西兵大挙来り砲戦数時間、黄昏中反に退く。間ノ峠の山上に胸壁を築く。新遊撃隊陣ヶ峰中山に戦つて利あらず長岡の伝習隊来りも戦いに合せず共に館原に退く。『会津戊辰戦史』

大鳥圭介、長岡兵とともに木曾を發し、山に登り村を過ぎ陣ヶ峰に至る。その日は木曾に帰陣せり。『南柯紀行』

館原村より朱雀二番隊寄合組土屋総蔵隊は、姥石山へ陣取り、大鳥圭介隊は陣ヶ峰下、大谷通行之山道峠へ陣取り遊戯隊は館原村に陣取候。『若松記』

朱雀二番寄合組隊二番小隊は、金窪から半里に胸壁を築き守る。朝に至り敵兵来襲、赤岩上に退き防戦し、退いて稻荷山に籠らんとす。敵三四十人屯集するを察知し、小隊頭原源次郎、隊士笹沼金次郎及び隋兵四五人を率いて敵陣を襲撃、天将一人を斬り、小銃弾を鹵獲(ろかく)せるが、敵増加し阿賀野川対岸の我軍に砲撃せられて、躊躇する間に一番隊二番隊を収集し薄暮館原に帰陣せり。『会津戊辰戦史』

九月三日、早曉、砲兵隊山を回りに堂目村背後の山地に至り西兵を襲撃。西兵大兵で我が兵の軍を囲み帰路を絶たんとし、兵を高目村に返さんとし大船沢に至れば、真ヶ沢の方位に砲声、軍を返す。朱雀四番士中隊戦利なく退却、この夜一門司令官黒河内新六、館原の本営に至り援軍をこう。朱雀四番士中隊付属隊、間ノ峠を守る。『会津戊辰戦史』

この日、衝鋒隊は如来堂を發し、山三郷応援として小荒井に赴く。『七年史』

九月四日、砲兵隊、堂山村に陣し、山徑に壘を築き六日まで備える『若松記節略』

館原本営より長岡兵百人を遣わし援護する。朱雀四番士中隊付属隊、間ノ峠を守る。館原、木曾方面守を失い未刻(午後二時)頃退却し夜に藤沢村に次す。館原にありし朱雀二番寄合組隊は、姥石山に陣し、大鳥圭介軍は塩川より来たりて陣ヶ峰の山下にあり。敵の大軍大鳥軍を襲うや、大鳥軍は援軍を西郷軍に乞う。笹沼金次郎一隊率いて援けしむ。大鳥軍は初め小勝を得しも潰散(かいさん)敗戦し小田付にめぐる。すでに敵は館原の対岸発砲し村中火起こる。西郷隊敗れて小布瀬原に収む。『会津戊辰戦史』

館原村、川向より大小砲烈敷、館原村に打懸けその節、棒火矢同村へ打懸け、すぐ様村中烟煙と成る。山上に取敷候様相叶わず、木曾山まで引揚。『若松記』

木曾村に引退きたり。夕方に至り敵追撃し来たり戦争起りしかども、何れの隊も人心恟恟(きょうきょう)きょうきょう。おののく奮発の気なく、十分の戦争にならず放火して引退きたり。慶徳まで引上げ、小田(付)村に帰りたり。『南柯紀行』

一柳幾馬、上田伝治一同、大鳥下宿へ参り面会、様子承候処、別段の戦争も無く、之瓦解の趣に付、嚴び敷談判に及び、二小隊、館原村へ引き返させ長岡兵も百八十人ほどの人数半分引返す。『若松記』

九月五日、朱雀四番士中隊付属隊、藤沢を發し、正午一合村に至り、本隊は西の嶺上を守り、付属隊は貉(むじな)森を守る。『会津戊辰戦史』

胸壁にありて砲戦するのみ。山三郷方面に赴きたる諸軍と母成峠より撤退した大鳥圭介の兵とをもつて進軍せしめんと、樋口源介を館原の陣営に遣わし、方略を定めたるが、樋口まだ帰らざるに西軍南より若松城下に入りし諸兵、兵を分つて坂下を略し進んで舟渡の背を衝く。軍事局ごとく出て防戦す。西兵は威声を發し、大砲を連發して挟撃し勢い甚だ猛烈なり。片桐喜八は防戦したるも退く、上田陣将以下全軍山崎の渡頭を渡り亥の刻(夜八時)頃塩川に退却し陣将萱野権兵衛の兵に合す。白虎寄合組一小隊は窪村にあり、他の一小隊は舟渡の胸壁に在りしが、戦い敗れ、半隊頭佐藤清七郎隊士十四名を率いて勝方村を経て中田に至る。『会津戊辰戦史』

九月六日、白虎一番寄合組原一小隊、朱雀四番足輕隊山崎を守る。砲兵隊堂山村を守る木曾の我が軍敗れ、藤沢村に退く。『会津戊辰戦史』